

実践報告

多言語スピーチ会のお～きなわ！

～大分の多言語スピーチ会から沖縄に広がった子ども・学生・支援者のつながりと変容～

立山愛（多文化に生きるこどもネットワーク大分）、栃原玲子（立命館アジア太平洋大学）、
高橋美奈子（琉球大学）、島袋夏鈴（琉球大学）

2021年3月に開催した大分の「多文化に生きるこどもたちの多言語スピーチ会」の取り組みと、その取り組みを発展させた、沖縄で教員を目指す学生たちによる「子どものための多言語スピーチ会 in お～きなわ」、これら二つのスピーチ会を通しての子ども・学生・支援者のつながりや変容について報告する。

1 大分の多言語スピーチ会の取り組み

1-1 実践の目的と特徴

本実践は、多文化に生きる子どもたちのエンパワーメントを目的とした活動である。日本語学習者向けの日本語スピーチコンテストのように日本語の表現力や内容で競うコンテストではなく、使用言語を「自分のことば」とし、指定しないことで子どもたちのアイデンティティ形成を考慮しながらエンパワーメントを試みた点に特徴がある。

1-2 実践の実際

本実践は「多文化に生きるこどもネットワーク大分」という有志のグループが中心となり、別府市 APU PLAZA OITA を本会場として、会場は ZOOM による中継で各発表者に参加してもらいハイフレックス型で実施した。本実践の目的である子どもたちのエンパワーメントのために、5つの場づくりに取り組んだ。①子どもたちが自分の気持ちに向き合う場、②子どもたちが他者に気持ちを伝えるチャレンジの場、③子どもたちの気持ちを知り、考える学びの場、④散在する支援者との協働作業による信頼関係やつながりを生む場、⑤多くの人たちに多文化に生きる子どもたちの存在を知ってもらう場

1-3 結果と考察（子どもの変容について）

発表者 25 名、視聴者約 130 名の参加があり、多文化に生きる子どもたちの気持ちを多くの方と共有する機会となった。スピーチ会の 3 か月後に改めて視聴する場を作り、感想や意見を出し合う会を催した。発表者の感想には、自分の「ことば」に対する肯定的な捉えへの変容、発表後の自己肯定感の向上、発表者同士での共感や気づきなど、子どもたちの変容が感じられる内容が多かった。また、視聴した子どもたちの感想にも肯定的な変容がわかるものが多数あった。スピーチ会をつくる協働作業の中で、子どもたちだけでなく、県下に散在する支援者同士のつながりも形成された。またオンライン開催だったため、県

を超えての視聴者もあり、沖縄での開催に繋がった。今後もオンラインの利点を生かし、地域を超えて支援者を繋ぎ、散在している子どもたちをエンパワーメントする活動として多言語スピーチ会を改善しながら実施していきたい。

2 沖縄の多言語スピーチ会への発展

2-1 実践の目的と特徴

本実践は、2020年10月から行われた文化庁委託事業「子どものための日本語教育研修」での報告者らの出会いを契機とした関係機関との連携・協働を活かした教員養成を目的としている。本実践は、地域を越えた「人」というリソースや「多言語スピーチ会」を通しての新たなネットワークの構築が、後進育成につながる可能性を示した点に特徴がある。

2-2 実践の実際

本実践は、琉球大学教育学部子ども教育開発専修の必修科目「子ども学フィールドワーク」の一環として実施した。本科目では、多様な言語文化環境で育つ子どもたちが生活する〈場＝フィールド〉活動を通して、地域のリソースを活かした実践的指導力の向上を目指すことを目的としている。2021年度前期は、沖縄の外国につながりのある子どもたちをつなげ、子どもたちの理解者を増やし、子どもたちの自信につなげる目的で、大分で実施された「多文化に生きるこどもたちの多言語スピーチ会」の沖縄版を学生12名が開催することにした。

開催に至るまでには、共催のKoza International Plaza (KIP)を始め、多文化に生きるこどもネットワーク大分の皆さん、沖縄県内の日本語教室配置校の先生方、保護者等と連携・協力態勢を築きながら準備を行い、その過程で学生は、協力態勢の手順、広報、連絡・調整・交渉、個人情報保護、感染拡大防止への配慮等、多くを学んだ。

スピーチ会は、緊急事態宣言下の8月8日にZoomとYouTubeの動画配信で開催し、沖縄県内の外国につながりのある小中学生24名が自分の伝えたい言語（英語、日本語、ネパール語等）で、伝えたいことを発表した（視聴者は91名）。スピーチ会は、司会の学生が自分のことば「ウチナーヤマトグチ」で進行し、子どもたちの関係者からスピーチの感想をもらったり、参加者が互いを理解し、楽しめるアクティビティを設けたりと工夫を凝らした。

2-3 結果と考察（学生の変容と周囲への影響について）

今回の活動を通して、学生は子どもたちへの理解を深めただけでなく、連携・協働の重要性や地域のリソースの掘り起こし、責任感、自信を身につけることができた。さらに、参加した方たちへの影響として、スピーチ会に参加した子の学校における全校集会での表彰式、学生の教職への動機付け向上、県内の日本語教室担当者間のつながりへと発展した。今後の課題としては、どこでも誰でもできる活動にするための態勢づくりがあげられる。